

契心園

客殿のすぐ南にある契心園は、江戸時代後期（1603-1868）に作られました。池と噴水を組み合わせ、自然の風景を再現するように設計された「地泉」庭園でありつつ、見手楽しむスタイルの「鑑賞」庭園でもあります。

石灯籠と「築山」（人工の丘）、または五重の石塔と「鶴」をかたどった松の木を組み込んだ庭園を造園した人物が誰かはわかっていません。

池の中の島は、亀の形に作られています。鶴と亀はどちらも日本では長寿と幸福の象徴です。

律川の水が天然の小さな滝となり、「池」の後ろに流れ落ちていきます。池は、「心」の漢字の形に設計されています。

池にあるもう一つの島には、石の橋がかかっています。水中には鯉が泳いでいます。

瀧が水が池に落ちる箇所には、古代中国の神話的な山岳島で、不老不死の仙人が住み、凡人には近づくことはできないという蓬莱山を象徴する一連の岩が配置されています。

庭園には約 120 種類の植物が生育しており、もみじの葉が色づく秋には最も壮大な眺めが見られます。寺の僧侶達は、庭の花々や野草を生け花や茶道に用います。